航跡 3「臨床外科」（医学書院）第 51 巻、第 12 号、1996-11、PP.1450-1451

航跡 3

アジア小児外科学会（1）

木村　健（アイオワ大学医学部外科）

アジアは、東はニッポン、北はモンゴル、中国、韓国、南はインドネシア、そして西はアフリカとスエズ運河で境されたイスラエルバルカン半島と黒海の出口のボスポラス、ダーダネルス両海峡で境されたトルコの広大な範囲に入る国々によって構成されている。この広大な地域には、人種、宗教、歴史、文化、言語はもちろん、文明の度合いの大きく違う国々が国境を接してひしめき合っている。そうした国を代表する小児外科医が集合してできた学会がアジア小児外科学会である。産みの親、育ての親をつとめて来られた駿河敬次郎、葛西森夫、植田隆先生方のまとめ役としての御苦労は大変なものであったと伺っている。たとえば、会員の定義ひとつをとってみても、当初は個人会員と各国の小児外科学会を併せて会員とするいう、無茶苦茶な案が某国グループのゴリ押しによって採択された。そもそも会というものは、責任ある個人の集まりによって成立するものである。個人と団体が入り混じって会員をなすのは水と油を混ぜるようなものである。それでも、会が離散せずに存続して来たのは、まさにアジア的であるが、その背後にはアジアの小児外科の発展のためにという貴い信念をもって、勝手気ままな各国のリーダー達をなだめすかし、舵とりをして来られた先達の方々の努力があったからであろう。

1980 年代のはじめ、植田先生から、「アジア小児外科学会はこれから脱皮して近代化させる必要があるが、これは君らの世代に託された課題やな」と口説かれた。「人には誰にでもターニングポイントというものがある。その時期がくるまでは、先達や先進グループから習ったり、世話をしてもらったりする一方や、つまりインプット一色の期間やな。その間に力を貯える。時期が来たら、こんどは人を世話する側にまわる。つまり、いままでの貯えをアウトプットする側になるわけや。ところがターニングポイントというものは誤って判断したらあかん。早すぎたら青二才が出しゃばるなとやられる。遅すぎたら、あいつは何も出来ん奴やといわれる。そのタイミングの見際めが大事やが、君はちょうどその時期にさしかかってる。さしずめ、アジア小児外科学会を建て直す仕事をするのに今が最適やと思う」

諭されたりおだてられたりして、目からうろこが落ちるような気がした。ボストンで小児外科を習ってコウベに帰り、小児外科の手術に夢中で過ごしてちょうど 10 年経ったときのことであった。いわれてみると転機が来ているような気もする。それまでは、新しい手術をデザインしたり工夫を加えたりしては、欧米の学会に発表するのが面白くてしかたがなかった。だが、植田先生の一言で、自分が今まで義務を怠っているかのような気分にさせられた。そこで植田先生の転機論を素直に受け入れることにしたのである。

1982 年 2 月、発足以来 10 年間、一度も出席したことのないアジア小児外科学会にはじめて参加することになって、バリ島にやって来た。学会前日の理事会ではすでにアジア的“根廻し”が済んでいて、次期理事長に指名され、総会でもさしたる反対もなく、すんなりと証認された。かくしてアジア小児外科学会にはじめて出席した人間が、その日から理事長（Secretary General）として学会を運営していくことになった。国際学会の理事長には大変な仕事が課せられる。会則を読んでみると、個人会員は終生会員と一般会員。それに各国小児外科学会が“会員”として加入するとある。終生会員は入会金 100 ドル（US）を一括して払い込んだ人、一般会員は出席する都度 10 ドルを納める人である。アジアの貧しい国の事情を理解し対処するには、昭和 20 年代はじめの頃のニッポンを思い出してみるとよい。当時の日本で 10 ドルの外貨を自由に出来る人が何人いたであろう。とにかく、会員は永久個人会員のみに限定して会の建て直しを計るという作業に入った。一般会員には個別に手紙を書いて、終生会

航跡 3「臨床外科」（医学書院）第 51 巻、第 12 号、1996-11、PP.1450-1451

員になるためには今までに納めた額と百ドルとの差額を払い込んでもらうお願いをした。驚くなかれ、40 人ほどいた“一般会員”を称する人で、差額を納めた人は殆どいなかった。その後一年がかりでこれらの整理が終わり、新しい会則のドラフトも出来上がって、会員証および会員名簿の発行を終えたのは、次の学会がマニラで開かれたあとであった。1984 年マニラ総会では、私の作った会則案が殆ど反論もなく、某国のゴリ押しグループからも異論をとなえられることもなしに無事証認された。そのわけは、事前に何十通という手紙で“根廻し”を済ませていたからである。“根廻し”はアジアだけのものではない。今住んでいるアメリカにも、言葉は違え、ロビイストがロビイ活動をしている。ロビイストというと、なにやら黒幕、仕掛人、策士、フイクサーというイメージを受ける。だがロビイ活動なしに世の中が動くわけがない。とくに国際関係では絶対に欠かせない。

アジア小児外科学会は第 1 回が 1972 年、東京で太平洋小児外科学会を同時開催された駿河敬次郎教授によって創設された。誕生以来四半世紀、黎明期の混乱から抜け出し、今や近代的な国際学会として 2 年に一度の学術会議の開催はもとより、発展途上国内の学術発展にも力を貸している。ちょうど転機にあったわたしは、本学会が近代化への脱皮と、国際学術団体本来あるべきスタイルに変身するのに多少はお手伝いすることができた。オフィスの壁に掛かったアジア小児外科学会の会員証は、わたしが会員であることを証明するのにわたしのサインが入っている。この会員証を作るため、わざわざ上質の羊皮紙をイタリアから取り寄せ、印刷所に何度も足を運んで配置や活字の選択をしたのが昨日のことのように思い出される。今はアジアから離れて、時折学会の客人として出席するのみになった。だが、この学会はわたしにとって育てたこどものような存在である。発展を願うのみである。

話をバリ島の学会に戻そう。世界中から参加者のあった学会はそれだけで成功であったが、さらにもうひとつ秘められた成功物語があった。

当時、ホメイニ支配のイランでは反対分子を連日処刑していた。人々は明日はわが身かと夜も眠れない日が続いたという。すでに家族をアメリカに移住させた小児外科医の A も、テヘランを脱出するチャンスを伺っていた。そこにアジア小児外科学会の案内が来たから、千載一遇のチャンスと思ったことだろう。学会開催責任者の E と手紙を交わすこと数十回、学会として A を特別最高名誉客員教授として招くことにして、E はイラン政府筋に招待状を送りつけ、A の出国を許可して欲しいと懇願し続けたのである。しかし出国許可は下りない。オープンチケットをすでに手にしていた A は、連日のごとく空港におもむき、出国係官と不毛の交渉を続けていた。ある日、E の入れ知恵によって、住んでいる屋敷、家具、宝名その他金目のものすべてを写真に写して、公証人のところに行き、もし A が帰国せぬ場合にはこれらすべての財産一切を出国係官某に譲渡する」という誓約書を作らせ、それを出国係官某に見せたところ、相手はパクッと喰いついて来たそうである。パスポートに出国許可のスタンプが押されるや否や、真っ先に飛び立つ予定のルフトハンザに駆け込んだ。ドイツ経由で、地球を半周してパリに着いたのは、学会最終日のバンケットの最中であった。A の亡命が成功したのを知っていたのは、E とわたしだけであった。折りしも夜空には南十字星が輝き、プールサイドの晩餐会は名物のスコールにも遭うことなく、無事修了した。後日、E から聞かされたはなしによると、学会の経費で雇ったお祈りばあさんがバンケットの間中、会場から 100 メートルほど離れた密林で祈りの儀式を続けていたので雨が降らなかったのだそうだ。アジア小児外科学会は学術以外の分野でも興味のつきない学会である。